

繭の中の休日

ワサワサワサ。どこからともなくかすかな音が聞こえてくる。雨の音でもない。ましてや風の音でもない。窓の障子には外から強い日光が当たっている。久しぶりに晴れたようだ。雨のシーズンが終わりかけているのかも知れないと、布団の中のバードは思った。

ついたての向うではイトーはまだ、いびきをかいている。若いからよく眠るのだろう。

そう思いながらもバードは容赦なく、イトーに声をかけた。

「イトー、起きなさい。イトー！」

「グモーニング、バードさん。ゆうべは大分うなされていたようですが、背中の中の痛みは治りましたか？」

「サンキュー！大分良くなったわ。ゆうべは大イチョウが動く夢を見たの。

それより、ワサワサする音が聞こえけど何の音かしら？」

「えー、僕には聞こえて来ませんが」

「よく聞いてみて、隣の部屋からなの。あなた若いくせにあの音が聞こえないの」

「そうですか。なんだろう」

起き出したイトーは、隣の部屋をのぞいてみた。

「おはようさま」

手拭いをかぶった宿屋のおかみさんが、一生懸命に葉っぱを大きな平べったい籠の中に入れていいる。バードが言っていたワサワサという音が確かに聞こえて来る。

「あ、これはカイコが桑の葉を食べている音ですね」

「聞こえっが？おカイコ様は今育ち盛りだもんで。ほんとによく食うわ」

何段にも重ねられたカイコのベッドから聞こえて来るのは、何千匹ものカイコが桑をかむかすかな音が重なり合った不思議な音だった。



「バードさん、こっちに来てみてください」

イトーに急ぎ立てられたバードは、桑のある部屋に入ってみた。

「うわー！すごい数のシルクワームね」

「この地方は、冬が長く夏が短いので、春の養蚕が盛んだそうです。先月の月からカイコを育てはじめ、もう繭になっているカイコもいます」

縁側にひかれた蓆の上には、真っ白な繭や黄色い繭が並べてある。

「おカイコさまは、コメとおんなじぐらい大事だ。形のいい繭は、売ってやるが、大きすぎたり、小さすぎたりするものは、家にとっておいて、真綿ぶとんや真綿の着物を作る。」

「ここらは、冬が長くて寒いから、あったかく過ごすための必需品だな」



「売りに出した繭は、生糸になり、それを赤く青く染めて絹の着物になる。娘が嫁に出る時は、その着物もだせてやるのが、ここらの習わしだ。オラも嫁にくる時は、ひとつもらってきた。真っ赤な着物でな、この年になっては、恥ずかしくて着られん」

「そう言うと、おかみさんはうれしそうに笑った。」

バードは、この繭から作られた生糸が、ヨーロッパに送られ、ドレスになっているのだと感慨深かった。



馬も牛も手に入らないので、この日は休日に当てることになった。障子戸を明けると庭の小さな池と庭石見下ろせる。遠くに目をやるとゆうべ夢に見た大イチョウも青々と枝を伸ばしている。

「イトー、なぜお寺にイチョウを植えるの？」

「イチヨウは火に強く、火事になっても燃えないからです。現にあの飛泉寺も、120年ほど前に火事になりましたが、あの大イチヨウは焼け残ったそうです」

「だから、不思議なのよ。寺が焼けてイチヨウが残ったって、意味ないんじゃない？」

「それは、そうですが。でも、あの大イチヨウは、この村のシンボルで、何かあると村人はあの木の下に集まるのだそうです。ゆうべも、若い衆が「虫送り」という行事で、あの木の下で一杯やったそうですよ」

「虫送り？」

「はい、農家にとって害虫は農作物を食い荒らす天敵です。虫、送るわ！」と大声で叫び、村はずれまで行くんだそうです」

隣の部屋には、タバコの葉を買い付けに来た商人5人が泊っている。やはり、タバコの葉を輸送するために牛や馬が見つかるのを待っているのだろうか。

「チン、トン、シャーン」

暇つぶしに鳴らす三味線の音が聞こえてくるが、バードはどうしてもこの音が好きになれない。明治維新政府に雇われたイギリス人の技師プラントンが描いた日本地図をじっくり見ているが、この地方のことは一切描かれていない。かたっぱしから人に聞いても、次の駅通までのことは、よく知っているのだが、その先のことについては、からきし情報がない。西洋人が知らない道を選んで歩いているのだから、無理もない話だ。とりあえず、有名な山形市を目指そう。

